シン・ゴジラ対カンムス　ゴ級消滅作戦

鳥頭堂正太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東京にあらわれたゴジラことゴ級戦獣と艦娘達の戦いの物語です。

章ごとに話が進みますが、同時進行している場合があります。

書く順番は章順ではありません、気が向いた時に気が向いたエピソードを書くので続きはいつになるかわかりません。

パズルを組むように繋がっていく伏線をお楽しみください。

先にお断りしておきますが、艦娘はほぼ全滅します。

（最終的には全員復活（予定）するけどね）

感想などいただけると励みになります。

続きを読みたいなと思ったら、感想ください。

予定

１章　海ほたる編（第七駆逐隊）
２章　蒲田上陸編（陸軍）
３章　浦賀水道戦編（金剛型戦艦）
４章　相模湾潜水戦編（潜水艦）
５章　対深海棲艦要塞都市横須賀編（大和型戦艦）
６章　多摩川迎撃作戦編（霧の娘達）
７章　めぃさぁ殺棲艦光線砲編（あきつ丸、まるゆ）
８章　ヤシオリ作戦編（駆逐艦、アイオワ）
９章　二大怪獣東京駅激突編（ガメラ）
終章　最終決戦編（ガメラ）
最終章　艦娘編

を予定（未定）しております。

目　次

エピソード0　ぼく、提督のなんなのさ　―――――――――――――――　1
1章（カリ）　海底軍艦編
海底に消えた妹からの救難信号　―――――――――――――――　3
2章（カリ）　シン・ゴジラ登場　海ほたる編
其の壱　海ほたるからの手紙　―――――――――――――――　8
3章（カリ）　シン・ゴジラ対金剛型高速戦艦　浦賀水道戦編
其の壱　平穏な鎮守府の日常　―――――――――――――――　11
4章（カリ）　めいさぁ殺棲艦光線砲編
其の壱　女スパイ潜乳！　―――――――――――――――　14
終章　シン・ゴジラＶＳガメラ　最終決戦編
其の壱　江戸城決戦　―――――――――――――――　17

エピソード0　ぼく、提督のなんなのさ

山奥のド田舎の人気の無い小さな村で暮らしていた爺さんが亡くなった。

婆さんが亡くなってから、再三、年寄りが一人で暮らすのは危ないから、こっちに来いと言ったのだが、爺さんは「海が見える処や、人の多い街は嫌だから」と言って、移ってこないで、一人きりで暮らしていた。

葬儀やらなんやらで、何時間もかけて一時間に一本も無いようなローカルの単線電車（実は電車ではなく、パンタグラフの無いディゼルー車というらしいが詳しくは知らない）を乗り継いで、最寄り駅まで辿り着く。

今度は午前午後合わせて三便くらいしかない路線バスに乗り換え、まるで富士の青木ヶ原の樹海のような原生林の狭間にあって、今にも原生林の中に埋もれてしまいそうな未舗装な道を進み、いい加減、乗り物疲れした頃に着いた終点のバス停（無論、周りには何もないのは言うまでもない）でバスを下車。

それから、人よりも獣の方が通るんじゃないかと思えるような、獣道じみた山道をひたすら歩いて、ようやくたどり着いた古い家。

それが爺さんの家だった。

入ってみて驚いた。

戸には鍵もなく（まぁ、ここまでやってくる人自体居やしないんだが）、電気もガスも水道も無い。

いったい爺さんはどうやって暮らしていたのかと悩んでしまいそうな家だった。

家具類もほとんどなくて、財産整理の面倒なんて無さそうだなと思っていたら、家の裏に蔵があった。

こんな何も無い家に蔵？

と思ったが、それでも何かあるかもしれないと、知的好奇心に唆されて、蔵に向かってみると、錆びてボロボロになった門の錠がかかっていた。

鍵を探してくるより、叩き壊した方が早そうだったから、錠を叩き壊して中に入ると、まったく使われた形跡の欠片も無く、ひたすら埃にまみれ、カビ臭い匂いでいっぱいだった。
だが、それでも、辛抱強く中にあるものを調べていくと、どうやら、爺さんの若い頃の物が置いてあるようだった。
詳しい事は知らないが、爺さんは昔、海軍にいて、提督と呼ばれる、それなりに偉いさんだったらしい。
そこで一緒に働いていた艦娘といか呼ばれていた婆さんと出会って、戦いが終わってから、引退して、結婚したらしい。
男所帯な海軍に女がいたのは不思議な気がするが、まぁ、そういう事なんだそうだから、そうなんだろう。それはそれとして、とはいっても、蔵の中にはろくなものは残っていなくて、気になったのは、一冊の帳面だった。
その帳面には、「艦娘トノ記録　ゴ級消滅作戦ノ顛末ノコト」と書いてあった。
艦娘？
ゴ級？
聞いたことの無い言葉だった。
気になって、その帳面を持って蔵を出て、日の下にもって行き読み始める事にした。
そこには、まったく俺の知らない、まるで荒唐無稽な怪獣映画のような話が書かれていた。
シン・ゴジラ対カンムス
～ゴ級消滅作戦～

1章（カリ）　海底軍艦編

海底に消えた妹からの救難信号

潜水艦は軍事機密の塊である。
いつ、どこに出撃しているかを誰にも知られてはいけない。
親しい他種艦娘であっても、行き先や任務を教えてはならないのである。
知っているのは提督と秘書艦娘だけだ。
だから、潜水艦娘用に、港から姿を見せないまま直接潜水艦娘寮へと繋がる、秘密の水路がある。
その水路を通って、寮へ入り、鎮守府内の施設へ行く。
無論、他の艦娘との交流が禁じられている訳では無いから、鎮守府内においては自由に他の艦娘たちと交流している。
というよりも、潜水艦の活用状態ゆえに、潜水艦娘たちは個別の単独隠密行動を取る事が多く、それゆえに寂しいのか、鎮守府では人懐っこく、誰彼かまわずにつきまとうし、見学に来た一般人（鎮守府では、世間の理解を求める故に、一般人の見学を歓迎している。ただし、機密部署は厳重警戒され、立ち入り禁止になっているが）にも手を振ったり、敬礼したりするし、中には投げキッスをしたり、チラ見せしたりと、他の艦娘たちよりサービス精神が豊富である。
だから、暇な時の姿は鎮守府内ではちょくちょく見かけるが、実際の活動については、ほとんど艦娘達は知らないというのが、潜水艦娘達の実態である。
その日、潜水艦娘達のうち、伊号とよばれる潜水艦種の艦娘たちが、提督の執務室に呼ばれた。
提督の執務室は艦娘達のコーディネートによって、提督の執務室なのか、艦娘達の休憩所なのかわからない有様で、用もないのに、執務室にやって来て、ティーパーティーをしたり、床に落書き（流石に落書きしてもよいのは水性ペンと決まっている。かつて、油性ペンで落書きした艦娘がいて、消えなくて大問題になった事があるのだ）して

遊んでいる艦娘も珍しくない。
　潜水艦娘もちょくちょくやって来ては、桐箪笥の上に置かれている、ナノマテリアルで作られた霧の伊４０１の模型を寂しそうに眺めている事がある。
　おそらく、かつて、一時的に艦隊に所属し、艦娘達と行動を共にし、任務を遂行し、霧の彼方へ帰って行った霧の伊４０１ことイオナの事を思い出しているのであろう。
　だが、任務の話になると、さすがに遊びに来ている艦娘達は、秘書艦娘に追い出され、真面目な雰囲気で話が行われる。
　そんな訳で執務室に集められたのは潜水母艦の大鯨、伊号潜水艦海大型　伊１６８、伊号潜水艦巡潜型▪伊８　伊１３　伊１４　伊１９　伊２６　伊５８、伊号潜水艦潜特型　伊４０１、呂号潜水艦譲受艦　呂５００の１０人である。
　いつもなら、リラックスして緩んだ表情をしているのだが、さすがに任務の話とあって、皆、緊張している。
「皆、ご苦労さま。ちょっと不思議な案件があって、今回、ここに潜水艦娘の皆に集まってもらった。」
　提督は真面目な顔をして、皆の顔を見渡してそう言った。
「南方の海底から、救難信号が出ているんだ。それだけなら珍しくないんだが、発信元がありえないんだ。」
　そこで、いったん、提督は言葉を切り、潜水艦娘伊号４０１、通称しおいの方を向くと、
「発信元は伊号潜水艦４０３。しおいの妹艦にあたる。
　当人を目の前にして言うのもなんだが、知っているとは思うが、しおい達伊号潜水艦４００型は４００、４０１、４０２の三隻のみ建造され。
　４０３は戦時建造補充計画にて建造が決定。
　特型潜水艦第５２３４号艦として、呉工廠で起工するも直後の空襲で損傷し建造中止。
　伊号潜水艦４０３という名前さえ与えられないまま、終戦を迎え、未完成状態のまま解体されたはずだ。

そして、４０３の艦娘が見つかったという報告も無い。
にも関わらず、救難信号の発信元は伊号４０３だというんだ。わけがわからんよ。
というかな。伊４０３は資料がほとんど無い。
大体は、
起工直後に空襲により損傷し、建造中止となった。
だ。
起工した年月日も分らないというのはどういうことだ？
前後の伊４０２が１９４３年（昭和１８年）１０月２０日起工。伊４０４が１９４３年（昭和１８年）１１月８日起工だ。
それが、わかってるのに、なぜ４０３だけわからん。
となると、常識的に１９４３年１１月頃のはずだろう。
だが、資料によれば、起工直後に空襲により損傷、建造中止とあるが、呉工廠が空襲を受けたのは１９４５年３月の米機動部隊による西日本空襲まで、広島・呉地区の空襲の記録はない。
以降５月５日、１０日、６月２８日、７月１日、２４日、２８日・・・そして原爆。
辻褄があわないだろう。
どこが起工直後なんだ？
本当に起工したのか？
本当は伊４０３関連の予算、資材、人員等を他に転用・流用したのではないかと疑いたくなる程の資料の無さだ。
それとも、あるいは、実際には建造されたが、公式資料には残せない何かがあった。かだ。
４０４は９５％まで完成していたんだ。４０３が完成していてもおかしくはない。
しおい、お前は建造こそ佐世保だけれど、呉に配属されていたな。
何か知ってはいないか？」
提督がそこまで言うと、しおいを除く、全艦娘達はそろってしおいの方を向いた。
しおいは俯き唇を噛み締めていたが、しばらくして、口を開いた。

「提督。伊４０３については公式情報の通りのはずです。
」
「では、この伊４０３から放たれている救難信号はなんだ。
進水しグラーフ・ツェッペリンと命名されていたグラ子のようなケースなら艦に魂も宿るだろうし、艦娘として転生もできる。
だが、起工直後に空襲に損傷し、建造中止し、名前も無いのでは、魂は宿らないし、艦娘として転生は出来ない。
すなわち、伊４０３号として救難信号なぞ出せない筈だ。
では、考えられる答は一つしかない。
伊４０３号は無事に建造された。
だが、なんらかの理由で建造された事を無かった事にされた。
おそらく、軍から逃亡したのだろう。
そして、伊４０３号は艦娘として転生し、南方の海底に囚われている。
それが真実じゃないのか？」
しおいは顔を上げ、何かを決意したような顔をして、提督の顔を見つめて、口を開いた。
「やっぱり、提督には隠し事はできませんね。
はい、伊４０３は完成していました。
呉にいました。
でも、終戦時に私は呉に居なかったから、どうなったのかはわかりません。」
と言った。
「やっぱりか。
実は終戦時に呉にいた鳳翔さんにも聞いてみたんだが、降伏を是としない轟天隊という一派がいたらしい。
そいつらは、降伏など論外、徹底抗戦すべしと語っていたそうだ。
だが、降伏勧告を受諾して後に、いつの間にか居なくなっていた。
と言っていた。
俺が思うに、その轟天隊が伊４０３を使って逃亡した。
艦数が合わない事で、占領軍から取り調べを受け、事によっては、捜

索隊か出される可能性がある。
それならば、最初から無かった事にした。
そして、轟天隊は途中で４０３を破棄したか、撃沈され、４０３は艦娘に転生した。
と、俺は思っているんだ。」
と、提督が言うと、艦娘達は静まり返った。
「とはいえ、すべては俺の想像からの仮定の話にすぎない。
さて、ここでお前たちに相談がある。」
提督は並んでいる潜水艦娘たちをずらりと一瞥すると、
「この救難信号が出ているのは、南方の沖ノ鳥島沖の海底だ。
おそらく、途中には深海棲艦がうじゃうじゃいるはずだし、もしかしたら、伊４０３が深海棲艦に捕えられていて、奴らは君たちが来るのを罠をはって待ち構えているかもしれん。
本来存在しないはずの伊４０３からの救難信号なんだ。
無かった事にして、もみ潰せなくもない。
しかも、場所は２００メートル以上の深い海の底だ。潜水艦娘といえども、潜るのはとても危険だ。
だが、できれば、俺としては真実を明らかにして、伊４０３という艦娘がいるなら、艦隊に迎えたい。
さて、どうする？
行くか、行かないかは君たちに任せる。」
潜水艦娘たちは顔を見合わせると、にっこり笑って、
「行きます。そこに仲間が待っているんだから。」
と合わせたように、言った。
「すまない。危険だが、よろしく頼む。
そこは奥ノ鳥島沖の海底２０００メートルにある、ガメラ・メガムリオン。現地の言葉でガメラの墓場と言われている場所だ。」
と、提督は卓上に広げられた地図の海上を刺しながら、そう言った。
潜水艦娘たちの危険に満ちた冒険がはじまる。

2章（カリ）シン・ゴジラ登場　海ほたる編

其の壱　海ほたるからの手紙

こんにちは、提督。
潮です。
今日は遠征後の休日で、第七駆逐隊の皆と海ほたるに遊びに来ています。
海ほたるには、一年後にお手紙が届くという、タイムカプセルポストというのがあったので、皆とやってみました。
誰に送ろうか悩んだのですが、私は提督にお送りする事にしました。
だって、私達、艦娘は深海棲艦との闘いで、轟沈し、命を落とすかもしれません。
でも、提督ならそんな事はないでしょうから。
あ、でも、深海棲艦との闘いが終わって、鎮守府が閉鎖されて、提督が提督でなくなっているかもしれないですね。
でも、そうだったら、私達、艦娘だってどうなっているかわかりませんね。
だから、やっぱり、提督にお送りするのが一番ですね。
七駆の皆は、ここに来るのを楽しみにしていて、皆、とっておきのかわいい服を着ています。
もちろん、私も楽しみにしていました。
プリクラがあったので、皆で撮ったのを貼っておきます。

どうですか、皆、気合いが入ってますよね。
提督。
海ほたるから見る海は、深海棲艦との闘いで見る赤く染まった海とは違って、とてもきれいな青い海でした。
いつか、こんなきれいで静かな海を取り戻せたらいいなと思いました。

これから、ご飯を食べます。
海ほたるには、たくさんお店があって、どこで何を食べようか迷ってしまいます。
そして、お土産を買って、鎮守府に帰ります。
楽しかったです。
それでは、また、明日から頑張ります。
潮からの手紙より
その日、朧、漣、曙、潮の第七駆逐隊の四人は、休日を利用して、海ほたるに遊びに来ていた。
通常、艦娘は鎮守府内にある、それぞれの艦種ごとの寮に暮らしており、鎮守府を出る事はない。
だが、それではストレスが貯まるので、休暇には自由に外出してよい決まりとなっている。
しかし、休暇でも有事は起こり得るので、外出する歳には必ず場所と日時を事前に明記して提出する決まりになっていた。
そんなわけで、第七駆逐隊の四人は今、海ほたるにいるのである。
「ラーメン、うどん、そば、天丼、ちゃんぽん。」
「なんかいっぱいあって迷っちゃうね。」
「あ、うどん、そばのお店は海風っていうんだ。」
「あはは、写メ撮って海風に送ってあげようよ。」
「ちゃんぽんのお店なんて潮亭だってさ、潮。」
「あぁ、うぅ。でも、潮亭であって、潮じゃな・い・から」
「あ、佐世保バーガーがあるよ。」
誰かの声に、
「佐世保バーガー!!」
と目をぎらつかせ叫んだのは朧だった。
「佐世保バーガーと聞いては、佐世保の海軍工廠生まれとしては黙っていられませんなぁ。」
「朧、キャラ変わってるし」
「佐世保バーガーとは、長崎県佐世保市名物の手作りハンバーガーの総称なの。いわゆるご当地グルメの一種ね。

ひとつの決まったスタイルのハンバーガーを指していうのでなく、佐世保市内の店で提供される、手作りで、注文に応じて作り始める、作り置きをしない、こだわりのハンバーガーの解説を始めた朧。

突然、流暢に佐世保バーガーの解説を始めた朧。

「ｗｉｋｉ解説、乙」

漣がツッコミを入れるも、朧は止まらない。

「佐世保には佐世保バーガー認定制度が創設されていて、佐世保市の保健福祉部や旅行業界関係者などが、独自性・主体性、信頼性、地産地消、手づくりなどの項目を基準に審査し、合格した佐世保市内の店舗に限り、佐世保バーガー認定店としており、店の前に佐世保バーガーボーイのイラストが入った看板を設置しているわ。

有名なのは、ヒカリ、ビッグマン、ログキット、ラッキーズ等々。どちらも、それぞれ、個性あふれるハンバーガーを出しているの。」

と、止まらない止まらない。

その時、潮は道端に転がる黒っぽいオタマジャクシのような塊を見つけた。

（続）

3章（カリ）　シン・ゴジラ対金剛型高速戦艦　浦賀水道戦編

其の壱　平穏な鎮守府の日常

ドゴーン!!

耳をつんざくような凄まじい轟音が響いたと思うと、大和の主砲である46センチ砲から、凄まじい勢いで砲弾が飛び出し、彼方に立つゴジラに直撃し、粉砕した。

「ゴ級なんて一捻り、突撃一番を飲んでるからね。？」

振り返った大和はにっこり笑ってそう言った。

「いいね。でも、からね、からさ、からよ。どれがいいかな？」

「からさは大和っぽくないよね。」

「からよは偉そうな感じある」

娘三人寄れば鹿島、訂正、姦しいと言うけれども、大和を取り囲むように集まった艦娘たちは、喧々諤々、騒がしく意見を出しあっている。

それを少し離れた執務室の窓から提督が、一人、しまったなぁという顔をして眺めていた。

提督としてはちょっとしたイタズラのつもりだったのだ。

軍で発売している栄養ドリンクの元気イッパツの宣伝も兼ねて、艦娘がゴ級を撃退する映像を流し、ゴ級の上陸による被害に怯える都民へ、安心感を与えるという意図のもと、軍上層部より艦娘へ撮影依頼があった。

それで、鎮守府で随一の知名度から、半ば鎮守府の広報と化している大和に白羽の矢がたったわけである。

で、なぜ、提督がしまったなぁという顔をしているかというと、軽いイタズラで命令書に書いてあった元気イッパツを突撃一番と書き換えたのである。

誰かが言うと思ったんだ。

提督、突撃一番は栄養ドリンクじゃありませんよ。

って。
その時、恥ずかしそうに顔を赤らめていたら最高だった。
しかし、この鎮守府に所属している艦娘は、いずれも穢れない清い心の乙女だったのが災いした。
誰も、突撃一番が軍において使用された、男女間の性交渉における避妊用のゴム製品だと気がつかなかったのである。
ゴム製品が飲めるわけないのだ。
どうしよう。
そんな身から出た錆のような悩みに提督が頭を抱えていた。
それはまだ、この後におきる鎮守府史上最大にして最悪の悪夢に比べたら、はるかにお気楽な悩みであり、まさに最悪の悪夢の到来の笛の音によって、その悩みは終わりをつげるの
海ほたるに出現した巨大不明生物の対処に対し、
陸にあがった以上、海軍の手は借りぬ、陸軍が必ず始末する。
という、強烈な陸軍の主張を受け、
艦娘を指揮しての深海棲艦との戦いにより、苦しい戦いながらも、それなりに戦果をあげ、民衆から評価をされ、支持をうけていた海軍に比べ、
ほとんど功績をあげていない陸軍は焦っていたのだろう。
と判断した提督の決断により、後にゴ級戦獣と名付けられた巨大不明生物への対策には鎮守府は加わらず、陸軍さんのお手並み拝見という態度をとった。
その結果、蒲田に上陸した、巨大不明生物によって、帝都は甚大な被害を受け、陸軍は翻弄されたあげくに、さしてダメージを与える事もできないまま、進化し難敵となって、海中へと逃亡され、功績をあげるどころか、大恥をかかされたという結末に終わった。
ざまをみろ。
という気持ちが無くはないが、進化した巨大不明生物が再上陸を果たした際の被害を考えると、そんな気持ちも吹き飛んだ。
もはや、陸軍の面子がどうこうという事態ではない。
提督はそう判断すると、秘書艦娘の大淀をつれ、鎮守府を出て、御

前会議が行われている会議室に向かった。
その時、
「陸軍としては海軍の提案には反対である。
いかなる結果になろうとも、巨大不明生物は陸軍が、わしが倒す。なぜなら、今回の被害はわしの一発で始まった。だからあの巨大不明生物をわしらが倒し、国家に対して申しわけが立つようにせねばならんのだからだ。」
禿頭の男が会議場で熱弁をふるっていた。
男の名は無駄口錬哉と言った。
（続）

4章（カリ）めいさぁ殺棲艦光線砲編

其の壱　女スパイ潜乳！

明かりのついていない薄暗い部屋の高価そうな席に小肥りの男が座っている。
その前に、女が一人立っている。
男が言った。
お前は研修という形で海軍に転属になる。
だが、お前の本当の任務は、研修などではない。極秘裏に海軍の機密を入手してくる事だ。
そうだな、空母だ、空母がいい。
空母の情報を盗んでくるのだ。
つまり、スパイをしろという事でありますか？
そうだ。不服か？
いえ、そうではありませんが、そんな事をしなくても、きちんと協力要請をすれば…
女がそう言うと、男は激昂し、席から立ち上がると、拳で女をガンガン殴り始めた。
やかましい。
お前、わしに口答えできる立場だとでも思っとるのか！
あの巨大不明生物を陸軍が、わしらが、倒さねばならんのだ。
ましてや、海軍に、あの小僧に舐められっぱなしでたまるか。
なんとしても、巨大不明生物に対抗しうる戦力を陸軍の手で生み出し、巨大不明生物を倒すのだ。
そのためなら、海軍から情報を盗むくらいどうという事はないではないか。
それとも、お前、わしの言うことに異論でもあるというのか。
いえ、自分は閣下に向かって異論などあろうはずも。
そうだ。
お前はわしの命じるままにしておれば良いのだ。

はい、自分は閣下のご命令のままに、海軍でもどこでも行って参ります。
でも、その前に、どうか、閣下のお情けを。
ふん、わしの情けが欲しいか。
いいだろう、くれてやる。
まず、膝まずいて、いつものようにわしのに、ご挨拶してからだ。
そう言って、男は席を離れ、立ち上がり、女はこっくりとうなずくと、仁王立ちする男の前に膝まずいた。
（暗転）
その日、鎮守府には陸軍から二人の艦娘が研修生として、転属してきた。
一人は短くおかっぱに刈りそろえられた髪に、灰色の陸軍制服を思わせる上着にプリーツスカート、軍帽、背曩といういかにも陸軍らしい衣装。
左手に飛行甲板を持っており、腰周りに武装の無い艤装を装備しており、さらに丸めたコートを袈裟懸にしている。
特種船丙型揚陸艦娘のあきつ丸である。
もう一人は白スク水に、運貨筒を持ち、気弱そうな表情を浮かべている。
三式潜航輸送艇潜水艦のまるゆである。
いつものように8時からの朝礼の場で、提督は二人を艦娘達に紹介すると、あきつ丸を空母班へ、まるゆを潜水艦班へと配属させる事とし。
意外と面倒見のよい龍驤にあきつ丸を、まるゆはゴーヤに任せる事とした。
陸軍と海軍は仲が悪い事で有名だけれども、末端の艦娘までもそうであるはずもなく、
「龍驤や。なんや君、男の子かぁと思たわ。」
「あきつ丸であります。よく言われるのでありますよ。」
「あんたとはなんや、気が合いそうな気がするでぇ。」
それぞれに穏やかなムードで、彼女達は執務室を去り、それぞれの

寮に向っていった。

（続）

終章　シン・ゴジラＶＳガメラ　最終決戦編

其の壱　江戸城決戦

ガメラは復活した。
潮たち６人の艦娘の祈りの力と涙　によって。
とはいえ、全身傷だらけで、緑色の流血もおびただしい。
荒い息をつきながら、ガメラはよろよろと起き上がろうとしている。
「頑張ってぇ～、ガメラァ」
ガメラの足下で、艦娘たちが懸命に応援をしている。
その声に応えるように、ガメラは歯をくいしばりながら少しずつ身体を起こし立ち上がっていく。
ガメラはなんとか立ち上がった。
だが、フラフラしていて、足下もおぼつかない。
それでも、ガメラは周りを見渡し、炎の海と化している、東京駅周辺を一瞥すると、深く息を吸い込んでいく。
燃え盛っていた炎が、渦をまくように旋回をはじめ、ガメラの身体へ吸い込まれていく。
炎が鎮まってしまう頃には、ゴジラとの戦いで受けた深い傷はふさがっていて、ガメラは生気を取り戻していた。
ガメラは全身を奮わせ、
『プグルゥウゥオオオオオオオオー』
咆哮した。
ドシンッ
ガメラが力強く右足を踏み出した。
続けて、
ドシンッ
左足を踏み出す。
ドシン　ドシン　ドシン　ドシン
ガメラが歩み始めた。

ドシン　ドシン　ドシン　ドシン　ドシン　ドシン
ガメラの歩みが速くなる。
ドシンドシンドシンドシンドシドシドシドシ
疾走するガメラ。
ドッドッドッドッドッドッドッドッドッ
ガメラは跳んでいた。
ドンッドッドッドッドッそして、その勢いのまま、地面を蹴りあげた右足が消えて、ジェット噴射に変わった。
続いて、ドンッと地面を蹴った左足が消えてジェット噴射に変わった。
ゴォォォォォォ
疾走する姿のまま、ガメラは轟音を響かせ、飛翔んだ。
號
飛翔びながら、ガメラはプラズマ火球を発射した。
続けて、號、発射し、さらに大きめの火球を、號、と発射した。
火球は彼方のゴジラめがけて飛んでいった。
ゴジラは東京駅でガメラを打ち倒すと、ゆっくりと歩を進め、
そして、今、旧江戸城の天主台の所にまで、たどり着いていた。
目の前には大元帥閣下の住まう宮城がある。
世界の皇族が住まう宮殿に比べたら、質素とでもいっていいほどの建物である。
ゴジラは宮殿を間近に見下ろし、一瞥すると、大きく息を吸い込んだ。
そして、まさに身体中に溜めた息と共に、熱線を吐き出そうとした瞬間だった。
ドグォォォ
ゴジラの右横腹に火球が直撃した。
突然の衝撃に驚くゴジラ。
その時、
シュゴォォォォォォォォ‼
と、爆音を響かせながら、ガメラが飛翔んできた。

そして、ゴジラの右側を通り抜けた瞬間、左側のジェット噴射が止まり、左足が現れ、ドシンっと堀の中へ足を付きいれ、大地を踏みしめた。
そのまま右足はジェット噴射し続け、大地を踏みしめた左足を軸にして円を描くように旋回する。
回転の途中で噴射を止め、右足に変わる。
ドシンっと右足で地面を踏みしめるも、勢いは止まらず、ガメラの身体はドリフトしながら、江戸城天主台に隠れるように低い姿勢でゴジラに向かい合った。

文字にすると長いが、実際は一瞬のことであった。
そして、ゴジラがガメラに気をとられた時、ゴジラの顎から首にかけて、火球が直撃した。
そして、間を開けず、今度はゴジラの背に大きめの火球が直撃し、ゴジラはガメラの目前でアッパーカットをくらったように、背をのけぞらせていた。
そのスキをガメラは見逃さなかった。
いや、捕捉した敵目標へ向かって追走していくホーミングプラズマ火球の、スピードと目標位置をそれぞれ微妙に変える事で、ガメラはゴジラにスキを作らせたのである。
そして、その瞬間、低い姿勢から弾かれるように飛び出しガメラは、江戸城天主台を破壊し、崩壊させ、その崩壊していく瓦礫の中から身体を現すと、大口を開け、そのまま、ゴジラの首へと噛みつき、牙をたてた。
グギャャャャ
ゴジラが天空に向かって叫びをあげた。
その叫びと共に、吐こうとしていた熱線が空を切る。
ゴジラの首に噛みついた姿勢のまま、ガメラは両手の指をガッと広げ、爪を伸ばす。
そして、ゴジラを抱えるように腕を伸ばし、ゴジラの背に爪を刺し

貫き、抱えた。
そして、その姿勢のままに、ガメラは両足からジェット噴射して、飛翔んだ。
ふりほどこうともがくゴジラであったが、ガメラの爪はびくともしないほど、ゴジラの背に深く食い込んでおり、ガメラの牙はゴジラが息ができぬほどに首を咬んでいるので、逃れる事は出来なかった。
ゴジラの熱線によって焦土と化した東京の街をガメラは疾翔し続けた。
（続）